

## タイ植物調査の旅から

岩 槻 邦 男

バンコックを離れた翌日、私達のバスは、東北の街クオンケンから北西に向けて、広い原野をまっしぐらに走っていった。トラックの荷台に座席と屋根をとりつけただけのその乗合自動車は、満載の客と荷物を積みこんで、70キロから90キロの速度で突っ走る。舗装のない道路は細かい砂埃を巻きあげ、私達の白いシャツはみるみるうちに赤褐色に変わってしまった。車は揺れ、路傍の草はぐんぐん後方へ飛んではいくが、街という程家屋の集ったところもなければ、景色もいっこうに変わらない。乾き切った原野には陽光がいっぱいに降り注いでいるだけで、その上を赤褐色の道路がどこまでも続いていく。

ここでは、山も平原も、一切のものの造りが大ざっぱである。乾期と雨期の差があるとはいっても、東北部や北部では雨期に降る雨の量もしれている。その乾いた原野には、北から南まで同じ種類の雑草が続いている。四季のうつり変わりがはっきりしていて、山あり峡谷ありと地形の変化が激しい日本では、植物の種類も多く、多様な景観を示す自然が、この国の原野では単調にひろがっていく。しかし、その原野を突き切って、一度山地に足を踏み込むと、原始の姿を留めた森林の美しさはまた格別である。

旅の最初には、国立公園のプー・クラディンに登った。海拔1,200メートル位の高さのところから45平方キロに亘って平原になっている。その平原は堅い岩板の上にミズゴケが堆積して、一部は高層湿原のようになっており、松林の間には、昆虫を捕って育つウツボカズラやイシモチソウの仲間が沢山生えている。11月下旬は乾期に入って間もない時、日本の秋さながらに、キクヤマメの仲間の花が咲き誇る平原の彼方に、夕陽は鮮やかな雲の色を残しておちていった。

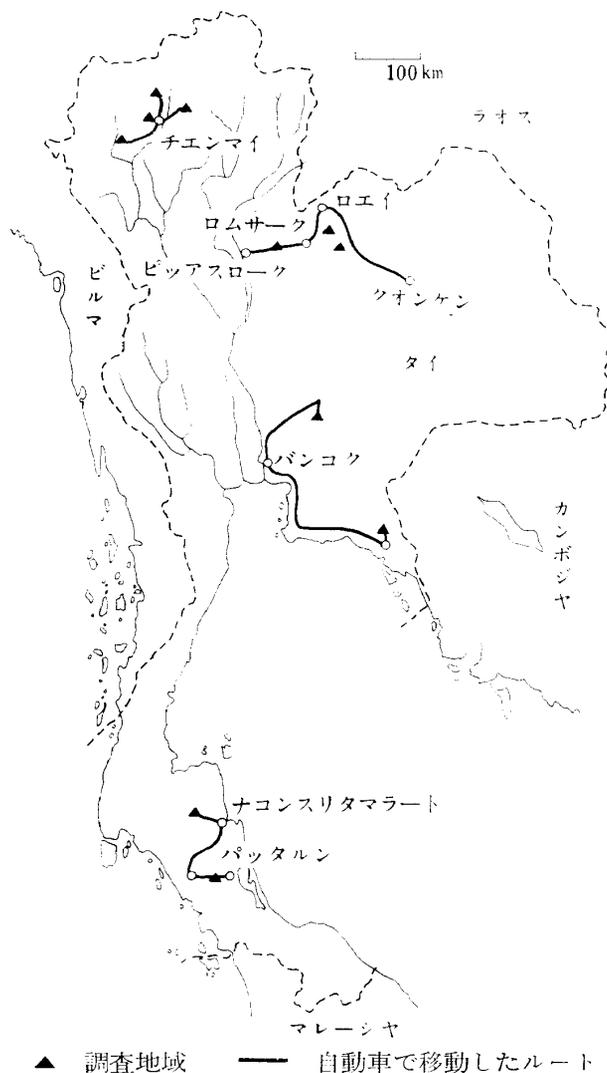


写真1 ウツボカズラ 食虫植物の一種で、プー・クラディンで撮ったもの。この山の湿地には、イシモチソウやタスキモ、モウセンゴケなど、食虫植物が多かった。

理学部の田川基二助教授をリーダーに、北川尚史（奈良学大講師）・福岡誠行（理・大学院）・岩槻邦男（理・助手）の一行4人は、11月上旬に日本を出発してこの国へ入り、シダやコケを手始めに、この国の植物相を調査すべく、これまでに、東北部・北部・半島部を歩き、更に東南部や中部のカオ・ヤイなども調べようとしているところである。タイ国森林局の好意ある援助を受け、非常に恵まれた旅を続けているのではあるが、何分開発が遅れているこの国のこととて、辺びな田舎ではいろんな困難に行き当たることもある。

プー・ルアンへ登った時など、幹線道路を離れて山麓の部落まで、21キロ進むのに6時間余を費した。トラックに積み上げた荷物の上に乗った私達は、棘の多い木の枝に何回か帽子を釣り上げられたり、川を横切るときは危険を避けて徒渉したりせねばならなかった。その間、道らしい道はなく、車は時々刈り入れの終わった田圃へ乗り込んだり、橋など全然見当らない川に行きあう度毎に、ザブザブと腹迄浸ってそれを横切ったりせねばならなかった。幾つかの深い川では車がスリップして動けなくなってしまい、木をきって来て車の下に敷くやら、綱で引っ張るやら、いろいろと面倒なことだった。

定まった登山路などない山を、野生の象が歩いて周囲の灌木を押し拡げたチャン・タン（象の小径）を通り抜けて、プー・ルアンの稜線を私達は歩いていった。2、3の山を除いて、この国の山には径など無い。南部のカオ・ルアンでは、密に茂った熱帯降雨林を、屈

強のポーター達が山刀で切り拓いてくれるその隙間を、私達はゆっくりと登っていった。そんなわけで、行動予定が狂ってしまうことも度々あって、ずい分下の方から水を担ぎ上げたこともあったし、とうとう食事もできずに露営を強いられるようなことも、一度ならずあったりした。

プー・ルアンからの帰り道、私達のトラックは私達の収穫物の上に唐辛子の袋を積めるだけ積み込んで、私達はその上に不安定な席を設けねばならなかった。年に一度入って来るか来ないかという自動車は、麓の村ではたいした人気で、私達が村に着いた夜は、村長さんの家の庭は村人でいっぱいになった位だった。帰る時も、何人かの少年達は、何とかして一度車に乗せてもらいたいものと、必死になって追って来た。危いから止せ、という同乗の森林局の人達の制止の声も、彼らの願望の強さには打ち克てず、遂に私達の方が根負けして乗せることになった少年は、起伏の多い山道を4キロばかりも追い続けてきた。将来はアベベより強くなるかもしれませんね、と森林局の人達と話し合ったりした位だった。

車さえ入って来ないその土地の人々は、それは素朴な感情で私達に接してくれる。おりから稲の刈り入れ時で、プー・ルアンに登った時には私達はポーターを8人しか雇い入れることができなかったが、彼らは重過ぎる荷物を担いで、それはよく働いてくれた。商品が流れ込んでくることも少ないこの地方では、村人達に経済観念が発達せず、原始のままの自給精神がうけ継がれているという。だから、日当を値上げしようという言葉は彼らにはそれ程の励ましにならず、手持の煙草1本、飴1個の方が、余程活気を与えるといった有様である。

タイ国の山はそれ程高くはなく、最高峰のドイ・インタノンでも僅か2,595メートルに過ぎないが、広大な北部の山地のほとんどは、深い緑に包まれて美しい。ところどころ山地民に焼き払われて緑の褪せてしまったところを指し示して、私達の全行程に同行して下さっている森林局のダムロン



写真2 ココヤシは熱帯降雨林の枝に結びつけて発芽させてから地に下ろす。カオ・ルアン山麓で。

さんが、今政府の事業としてあの部分の緑化を計っている、とまるでそれだけ禿げている部分のあるのを恥じるかのように話されるのを聞きながら、私達は、緑が薄くなってしまった日本の山の姿を思い出したりしたことだった。

北部の山地は北へ向けてずっと連なるが、この付近で中国の雲南などにある種類を幾つか見付けた私達は、国境の向うのビルマに蜿蜒と連なる山地を望見して、あの北を調査することができたら、分からないままに打ち棄てられていることがどんなによく分かっていくことだろうと、ほとんど涎を流さんばかりだった。

幾つかの幹線道路を別にすると、地方の道路は甚だ悪く、常に沢山の仕事道具を持ち歩く私達の移動は難渋を極める。或る時は私達の乗っていた小型トラックが横転して肝を冷やしたことがあったし、また或る時は、数日前に開通したという乗合自動車を利用したら、これは完全なトラックで、荷台に落花生と豚を満載したその上にお客が乗り合わせるものだった、というようなこともあった。慣れない土地のことだけに、予想外の困難に直面することもあるけれども、重いばかりにコケをつけた蘚苔林に入り、棘と蔓の多い密林を通り抜けて仕事をす時には、その美しさと珍らしさに私達は恍惚としてしまう。専門の植物の収穫も大きく、未記録のものの発見も相当な数に達する。

丁度私達と時を同じうして、オランダとデンマークから植物調査の人達がタイ国にやってきていて、それがそれぞれこの国の森林局のお世話になって動いているのであるが、収穫の大きさでは私達のもの断然第一番で、私達に同行して下さっているダムロンさんは他の人達の手前、ずいぶん良い気持のようだった。

しかし、そのオランダ・チームとドイツ・チームなどで、デンマーク・チームとカオ・ルアンで、それ



写真3 辺りな村へ入れば、老若男女を問わず村人が集ってくる。写真はカオ・ルアン山麓のワット・キリ・ワンで。

ぞれ逢ってみて、私達はいろいろと考え込むことが多かった。植物調査では相当の歴史を持つ北欧の国々は、装備は私達のものより遙かによく、それでいて、無理のないようにゆっくりと仕事をしていて、調査に来ている間に、できるだけ沢山歩いて、できるだけ稼ぎを貯えようというような考え方は、どうやら日本人だけのものようである。また、デンマーク・チームのザイデンファーデン氏は元外交官、駐タイ大使もやった人で、森林局舘主任のテム氏とは以前から共同でランの野生種の目録を準備したりしている人であるが、こういう人の存在は、その国の文化のレベルを示す良い標準にもなるように思われる。

それはさておき、私達の僅々100カ日の山廻りはこの広大な国土のほんの一部をさぐったものに過ぎない。しかも、それだけでも、ほとんど未知であったタイ国植物相がうんとよく分かるようになったし、今後東南アジアの植物を研究していく上での基礎的な資料集めという意味でも有意義なものだった。何分広大な面積を擁するこの国のことであるから、まだその植物相の探究も緒口についたばかりではあるが、これを契機に、今後いろんな方法でこの国の植物がより詳細に調べられるようになってほしいと念じている。